

平成 25 年度文学研究科共同研究 研究成果報告書

|       |      |
|-------|------|
| 申請者氏名 | 田中 均 |
|-------|------|

|       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 研究課題名 | 芸術における「参加」の問題——美学理論と演劇研究からのアプローチ |
|-------|----------------------------------|

研究組織

| 氏名     | 所属機関・部局・職名        | 専門分野   |
|--------|-------------------|--------|
| 田中 均   | 文学研究科・准教授         | 美学     |
| 古後 奈緒子 | 龍谷大学他・非常勤講師       | 舞踊学・美学 |
| 須川 渡   | 文学研究科・助教          | 演劇学    |
| 馬場 朗   | 群馬県立女子大学・文学部・教授   | 美学     |
| 正木 喜勝  | 文学研究科・招聘研究員       | 演劇学    |
| 森 功次   | 山形大学・日本学術振興会特別研究員 | 美学     |
| 渡辺 浩司  | 文学研究科・助教          | 文芸学    |
|        |                   |        |
|        |                   |        |
|        |                   |        |

※1行目に研究代表者（申請者）を記入してください。

※本学関係者については所属機関（「大阪大学」）は省略してください。

研究の目的・計画

研究の目的

芸術における「参加」という主題は、美学・芸術学の領域において近年国際的に注目を集めている。しかしこの主題は多くの分野に関わるため、議論が錯綜しているのも事実である。芸術における「参加」について包括的かつ原理的な考察を行うためには、現代美術の批評と研究の領域で展開されている議論を踏まえるとともに、美学と演劇学のアプローチも総合することが必要である。本研究は、芸術における「参加」とは一体いかなる事態を指し、そこにいかなる意義と問題があるのかについて展望を得るための端緒として、美学と演劇学という異なる方法論を持つ隣接分野の協力関係を構築する。

研究計画

2回の公開研究会を行う。

第1回研究会では、美学と演劇学の両分野における「参加」をめぐる基本的な問題系を確認し、今後の具体的な研究課題を設定する。第2回研究会では、第1回研究会で設定された課題を踏まえて、共同研究分担者が、これまでの研究の蓄積に基づいていかなるアプローチをなすのか報告する。

## 研究成果

### 研究会の開催

研究計画通り、研究期間中（2013年9月～2014年3月）に2回の研究会を開催した。  
第1回研究会は、12月23日（月・祝）に開催した。発表者と論題は以下のとおりである。

- ・田中均 「近代美学の基礎概念としての「参加」」
- ・渡辺浩司 「古代ギリシャ悲劇と「参加」」
- ・須川渡 「日本のコミュニティ・シアターにおける「観客参加」」

田中均は、1990年代以降の現代美術における「関係性の美学」を巡る論争を紹介した上で、ビュルガー『アヴァンギャルドの理論』を踏まえて「参加型芸術」の暫定的定義を試みた。渡辺浩司は、古代ギリシャ悲劇における市民の上演への参加や上演への観客の関与の事例について紹介した上で、儀式でもあったギリシャ悲劇を参加型芸術と呼ぶことに疑問を示した。須川渡は、戦後日本のコミュニティ・シアターの事例として、自立演劇と農村演劇を取り上げて、両者における素人の参加のあり方を比較した。

第2回研究会は、2月22日（土）・23日（日）に開催した。発表者と論題は以下のとおりである。

- ・馬場朗 「18世紀フランス芸術論における「公衆」観とその変遷への一視座：ルセール・デュボスからファルコネ・ディドロそしてルソーへ」
- ・古後奈緒子 「ルドルフ・フォン・ラバンの祝祭論～舞踊コロスの構成と舞踊家の組織について～」
- ・正木喜勝 「新劇史からの「参加」——『全線』（村山知義作・佐野碩演出）を例として」
- ・森功次 「サルトル『文学とは何か』（1947）における関係性の美学——芸術における参加、関係性、アンガージュマン——」

馬場朗は、18世紀フランスの公衆観の変遷を紹介し、その過程の中で観客参加はむしろ減退したのではないかという説を提示した。古後奈緒子は、ルドルフ・フォン・ラバンがナチズムに順応したのはなぜかという問題意識から彼の祝祭論を分析した。正木喜勝は、第1回研究会で田中が提起した参加型芸術の定義が、村山知義作、佐野碩演出『全線』の上演に適用可能かを検証し、新劇における観客参加のあり方を分析した。森功次は、「関係性の美学」を巡る論争と、サルトル『文学とは何か』との間に見出しうる接点について論じた。

### 外部資金応募・獲得状況

申請者は科学研究費補助金に応募して採択された。研究種目・課題名などは以下の通り。  
若手研究（B）「近代美学史における「テアトロクラティア」—美学と民主主義の相関関係の研究」（課題番号：26770044）2014年度～2017年度

**研究発表** [①論文・書籍、②口頭発表、③研究会開催、④その他に分けて記入してください。]

① 論文・書籍

須川渡：「よみがえる〈故郷〉—秋浜悟史『啄木伝』(1986)の中の〈岩手〉」『民族藝術』30号、民族藝術学会編、2014年、pp.64・68

正木喜勝：「宝塚と新劇(一) 宝塚のパラダイスと関西新劇の誕生」『阪急文化研究年報』2号、2013年、pp.11-18

渡辺浩司：メイ・スメサースト『ギリシア悲劇と能における「劇展開」の比較研究に向けて』渡辺浩司・木曾明子訳、法政大学能楽研究所、2014年3月。

渡辺浩司：「エクフラシス——ローマ帝政期における弁論教育——」、『弁論術から美学へ——美学成立における古典弁論術の影響』(平成23年度～平成25年度科研基盤研究(C)(研究代表者：渡辺浩司)研究成果報告書)、2014年3月、7-15頁。

② 口頭発表

田中均：KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2013 フリンジ企画 使えるプログラム [批評講座]理論編1 「誰のために劇を「使う」のか？」2013年9月7日、GACCOH

古後奈緒子：リサーチとしてのアート・ワークショップ第3回「モダニズムとファシズム 20世紀初頭の芸術と政治について」「近代のフェスティバル —共同体の生成装置—」2013年9月7日、大阪大学

森功次：名古屋哲学フォーラム 2013 秋「美を語る資格があるのは誰だ？ 心理学(脳神経美学) vs 科学哲学 vs 分析美学」、「美的経験と価値判断との間にある謎：来るべき共同研究に向けて」2013年9月

森功次：第25回日本ポピュラー音楽学会年次大会「ポピュラー音楽の美学と存在論(2)：今井論文をめぐるオープン・ディスカッション」討論者「ポピュラー音楽における Higher Level Ontology:リマスタリング、カヴァー、リミックス」2013年12月、関西学院大学

森功次：科研「表象媒体の哲学的研究——画像の像性と媒体性の分析を中心に」(基盤C、研究代表者：小熊正久)「サルトル『想像力の問題』結論部第二節「芸術作品」精読」2014年1月、山形大学

③ 研究会開催

渡辺浩司：松尾大講演会「レトリックにおける法廷メタファーが近代美学成立に果たした役割」2013年12月21日、同志社大学

④ その他

古後奈緒子：早稲田大学『演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開』プロジェクト

「ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938年問題〉」(2014年3月 web 出版) 翻訳 解題「ドイツ語文献解題 C：抵抗と順応のドイツ・モダンダンス小史—ラバンとヴィグマン」を執筆、および7点の文献を翻訳。

須川渡：劇評「天真爛漫な祝祭劇 —「もみじ・あざみ寮」ひな祭り寮生劇」『大阪日日新聞』2014年4月9日

森功次：Salon de NAKAYOSI 2 (愛知県美術館学芸員、副田一穂とのトーク@ビジターセンター アンドスタンドカフェ 2013年9月、名古屋)

森功次：現在のアート<2013>「文化について議論するための分析美学」2013年12月、森美術館